

緊張感を持続できるか？

小林悟

前筑波大学講師(生物科学系・遺伝子実験センター)
現岡崎国立共同研究機構統合バイオサイエンスセンター基礎生物学研究所・教授

新しい大学という理由で筑波大学を選び、運良く入学したのが24年前。学類卒業後は大学院に進み、そのまま筑波大学で研究を続けた。その間、他大学に移ることもなく、また留学もせず筑波にとどまっていた。それは、筑波大学で生まれ育った研究を世界に広めてゆきたいという多少の気負いがあったからである。しかし、研究もある程度軌道に乗り筑波が安住の地に思えたとき、新たな場所で研究を始めたいという衝動を抑えきれなくなっていた。筑波大学から岡崎に移りはや2年、筑波大学のことを振り返る余裕が出てきた。

得体の知れない緊張感

筑波大学は、博士号をとったばかりの若手の研究者・教官がほぼ独立して自分自身のテーマをのばしてゆくには良い環境を提供してきた。講座制を廃したシステムとともに、学内プロジェクトなどの研究資金サ

ポートシステムを有していたためである。私自身にとってそれ以上に重要であったのは、教官をはじめ大学院生や事務官との交流であった。私が筑波大学で過ごした期間、遺伝子実験センターとTARAセンターが創設され、これらの施設における人的な交流から得たものがその後の研究生生活の大きな糧となったのである。

当時、遺伝子実験センターの1階には飲食喫煙が自由にできる大部屋が存在し、夜な夜な実験に疲れた大学院生やポスドクたちがどこからともなく集い、あやしい酒盛りを開いていた。酒量が増すにつれ、自分自身の研究に対する熱い思いをぶつけ合う場となるのが常であった。日々の実験のみに追われていた大学院生の私にとって、「なぜ研究をするのか?」「面白い研究とは何なのか?」「自分自身の研究はどう面白いのか?」など、たやすく答えられる代物ではなかった。ここで経験した数年間で、研

究に対する得体の知れない「緊張感」を植え付けられた。この「緊張感」は、単に実験に集中するというだけではなく、人生の中で研究を行うことをどのようにとらえるか真摯に考える姿勢であったように思える。その後、TARA センターの創設に微力ながら関わる機会を得て、第1期のTARA プロジェクトにも参加させていただけることとなった。ここでもまた得体の知れない「緊張感」に出会うことになる。TARAセンター創設期の関係教官と事務官がセンターに抱く熱き思いに圧倒されると同時に、教官方のプロジェクト研究の独創性に感銘を受け、「TARA センターにふさわしい独創的かつ面白い研究を行うにはどうしたらよいか？」という問いに苛まれ続けた。これが「緊張感」として心中に深く植え付けられたのである。

いつも「緊張感」を

ここで強調しておきたい点は、今までに得ることができた「緊張感」が私の研究生生活の上で非常に重要な役割を果たしてきたということである。もちろん、精神論だけでは、独創的で面白い研究はできないのは重々承知してはいる。しかし、日々の研究成果について思いを巡らし、常に新たな研究の芽をつかみ取るという姿勢は必要不可欠であるように思う。おそらく、「緊張感

とは、研究に対して真摯に向きあう姿勢を無意識にとらせる圧力であったのだと思う。この「緊張感」はどのような研究分野にも、また学問を学ぶ上でも存在するであろう。大学の教官は、学生や後輩たちにこのような「緊張感」を授け、維持する義務があるように思う。それが、大学における教育・研究の歴史として根付くと信じている。これは非常に困難なことのように思われるかもしれないが、「緊張感」を常に抱いている教官や研究者にとっては意外と簡単なことなのかもしれない。

面白いことに、この「緊張感」は大学や研究施設の創設時に誰もが抱く「熱き思い」で代用することができるようである。時とともに「熱き思い」が薄れるのは世の常であるが、それに代わって新たな「緊張感」を作り出せるかどうかで大学や研究所などの組織の維持が正常に行われるかが決まるようである。筑波大学は30周年を迎え、すでにこの「熱き思い」は薄れ、成熟期に移行している。世の中の変革とともに、大学創設時の理想や使命が変わることはあっても、教育・研究に関わる「緊張感」だけは維持してほしいと思う。また、来年度から大学共同研究期間を含め国立大学は、独立行政法人として新たな岐路に立たされるわけであるが、制度が大きく変わっても大学や研究所の質がそこに所属している構成員

に依存している状況に変わりはない。この
ようなときこそ、各教官の「緊張感」こそ
が大きな役割を果たすように思える。

筑波大学を離れて

私事ではあるが、住み慣れた土地をあと
にしてまず感じたことは、筑波での生活や
研究がいかに楽であったかということであ
る。20 数年間も同じ場所にいたのであれば
当然のことではあるが、慣れ親しむことの
ありがたみを身をもって体験した。しかし、
それと同時に、その“慣れ”によって自分
自身の「緊張感」が希薄になっていたこと
に気づいたのも事実である。岡崎の地に新
設されたセンターに移り、再び「熱き思い」
と「緊張感」がよみがえってきた。あたかも、
遺伝子実験センターやTARAセンターで自
分自身が一癖も二癖もある先輩たちの輪の
中に放り込まれたときのように。

(こばやし さとる)